姫路城を見てきました。規模・美しさ・貫禄は異論なく日本一のお城です。

樂音

佛歴二五六五　西歴二〇二二
令和四年十二月号
発行　樂音寺　住職　内藤睦雄
電話　090-3140-3931（携帯）
0553-47-3475（お寺）
FAX　0553-47-3495（只今使用不可）
寺庭　090-8643-0852（藤井牧子）

十二月・新年の予定

十二月一日　部内旅行（十一月三十日から）
十一・二十五日坐禅会　朝六時三十分

一月四日　新年ご挨拶
十日　臨済寺
臨済禅師毎歳忌・開祖太原禅師初月忌・開単布鼓庵毎歳忌
十二・十三日　師範会（本山）
二五・二六日　代表委員会（本山）
十四・二十八日坐禅会　朝六時三十分

今月の掲示板

師走何ぢゃ

我酒飲まむ君琴弾け

泰然としている師匠でさえあちこち慌ただしくしているという師走、何やら落着かなさを感じるというのは世の常。ところが、たちどころに「何ぢゃ」と突き放しておいて、憧れの芸者遊びに興じる幸田露伴であります。周りがバタバタ落ち着かない暮れのひと時、敢えて自分は酒を飲もう、おい姐さん踊りを見せてくれ、琴を弾いちょくれ、というのだから豪儀なもの。きれいどころはお酌をしたその手で三味線を手に苦笑しながら「ほんまに、しょうもないお人どすなあ」こういう、のったりとした台詞は、嫌いではない。

偶然『蝸牛庵句集』を手に入れて、史伝などの堅い仕事のイメージが強い作家・露伴の別の面を見た思いで嬉しい。パラパラとめくって偶然目に入った「何ぢゃ」。

露伴には約二十五年掛けて世になした労作の『評釈芭蕉七部集』があり、改めて読んでみたいと感じる師走である。『蝸牛庵』は露伴の別号。

不識

実は世の中、どうでもいいことを敢えて論(あげつら)う、男だからとか女だからとか、若いとか年寄りとか、挙句、学校の成績がどうだったとか、どの大学を出ていたとか。名前の漢字はこうだとか氏素性はどうだとか。つくづくどうでもいいように思うのだが。

逆にあなたはどなた？　と訊かれたらなんと応えようか。お酒が好きだ、とか寺の住職をしてまして、とか説明しようとしても、

それは必要かもしれないけどそれで十分ではない。説明に口を開けば開くほど自分本来から遠ざかる。およそ我々は自分の事をどれだけ知っていることだろう。よく自分はこうだから、と性格を話す人がいるが、聞いていてえ？そうかなあ、と思ったり。勝手な思い込みじゃない？　と感じたり。これが自分、と思うそれも、頭の中で考えた自分であって主観でしかない。考えていくと実在している自分なんてものもないのかもしれない、と行き着く。否、そこは冷静になって、自分は何者でもない、と知ることだろう。それを前提に自分を知り、相手を知り、物事考えるべき。中国梁の武帝が達磨さんに向かって「おまえは誰？」と訊いて「不識（知らない）」と応えたのは、それを伝えたかった、後世の我々に。

臨済寺専門道場へ掛搭

「たのみましょう～」玄関先で入門をお願いして二日間、「庭詰」という上がり框で横すわりの苦痛から解放されて三日目は昨夜寝かせてもらった部屋に放り込まれ、終日座禅しろということか。部屋の入口に『旦過寮』と書いた木札が目に入る。これが「旦過詰」というもの。「夕刻来て翌朝（旦）過ぎ去る」とでもいう意味か。改めて見渡すと普段使わない部屋らしく、かび臭いし障子戸の隙間は大きく、窒息はないだろう。じっとしていてもどこかで見られている気がして落ち着かないし、もちろんくつろぐことも無理。

突然一人の雲水さんが入ってきて「このノートを全部写せ」とそれだけ言って消える。じっとしているよりましかな、と大学ノート

にいっぱいの文字、あとで考えるに寺の規矩やあらゆる場合の回向、そして四季折々の行事の内容とか様々細かに書かれていて、後でそれがどんなに大事なものになるか、なんてことはつゆ知らず。

翌日の夜だった。ノートを持ってきたその雲水さんが「これ食え」と言って皮を全部むいたバナナを手渡してくれた。皮つきだと証拠が残るからだとすぐ理解して、初めて人の心に触れた気がした。後日一年後、新しい入門者に、私がいい思いをしたからと、むいたバナナをもっていってやった。そいつはなんと言ったか「うわっ、きたねえ、いらない」ため息。

日に日に現場の様子の進み具合に、樂音寺を訪ねる人の喜ぶ顔に、私も喜ぶ。どんどん資材も入り、足場も連なる。大きいと思った倉庫もだんだん小さく映る。

１２月２日現在